

# 琉球大学学術リポジトリ

## 南洋廳『南洋群島國語讀本 卷五 本科用』

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2018-04-16 キーワード (Ja): 矢内原忠雄 キーワード (En): Yanaihara Tadao 作成者: - メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/38082">http://hdl.handle.net/20.500.12000/38082</a>

# 矢内原忠雄文庫

史料名	南洋廳『南洋群島國語讀本 卷五 本科用』昭和七年三月二十五日發行
封筒番号	207
原文所所蔵者	琉球大学附属図書館
撮影年月日	平成17年11月11日
撮影者	富士写真フイルム 株式会社
備考	



南洋  
群島

國語讀本

卷五

本科用

南洋  
廳



1/10

375.8  
NA  
5

南洋  
群島

國語讀本

卷五

本科用

南洋  
廳

もくろく

一 お友達	一	十五	日本三景	五十二
二 ルイス君	三	十六	虹	五十六
三 天の岩屋	七	十七	奈良	五十九
四 太郎の日記	十一	十八	郵便	六十三
五 大蛇たいち	十五	十九	手紙	六十六
六 弟の体操	二十	二十	父の教	七十二
七 種痘	二十四	二十一	東京停車場	七十三
八 美シイ心	二十七	二十二	鳥の巢	七十六
九 熊襲征伐	三十二	二十三	八幡太郎	七十八
十 わたし舟のおきやく	三十七	二十四	火	八十二
十一 波	三十八	二十五	古机	八十六
十二 南洋群島	四十	二十六	母の心	八十九
十三 雨	四十五	二十七	熊のさやき	九十一
十四 仁徳天皇	四十八	二十八	天の川	九十四



一 お友達

一 お友達

つまずきころんだ  
一人の友を、  
だいて起して  
ちりうちほらい、  
いたみはせぬかと  
後に一人。

道具

二

おとしてちらかなる學校道具、  
ひろいあつめて顔さしのぞき、  
けがはなくてと前にも一人。

三

よろこびかなしみたがいに分けて、  
なかよくするのが友達の道。  
あゝ此の子どもら子どものかがみ。

達

机僕當

二 ルイス君

四月四日の朝、當番で僕が机の上をふいて  
いると、先生が知らない生徒を一人つれて  
お出でになりました。

教室

「ここがあなたの教室です。席せきはあれにし  
ます。」

呼

といて、此の間からあいていた席をおさ  
しになりました。そうして「ホセイとお呼び

二 ルイス君

三

級

になりましたから「はい」と答えますと、  
 「此の方はルイスさんとゆうて、今度遠い  
 所から来て、今日から此の級へはいる方  
 です。」  
 とおっしゃいました。又ルイス君には、  
 「これは級長のホセイさんです。分らない  
 事は此の方にお聞きなさい。」  
 とおっしゃいました。私ども二人はていね

黒

汽船

百 哩

いにおじぎをしました。  
 ルイス君は色が黒くて、まるくと太って  
 います。氣がさっぱりして、二三日たつ  
 と、前からの友達のようになりました。  
 ルイス君がこれまで居た所は、南洋の東の  
 方で、椰子の木が多いそうです。何でも汽船  
 に何日ものり通して、こちらへついたそう  
 ですから、何百哩かはなれているのでしよ



運動場

う。

ある日、僕が運動場へ出て見ると、ルイス君が泣いていました。聞けば、級のものが二三人で、ルイス君を生いきだといって、いじめたのだそうです。僕は

「君、しっかりしたまえ。男は泣くものではない。」

と言って、力をつけてやりました。ルイス君

問

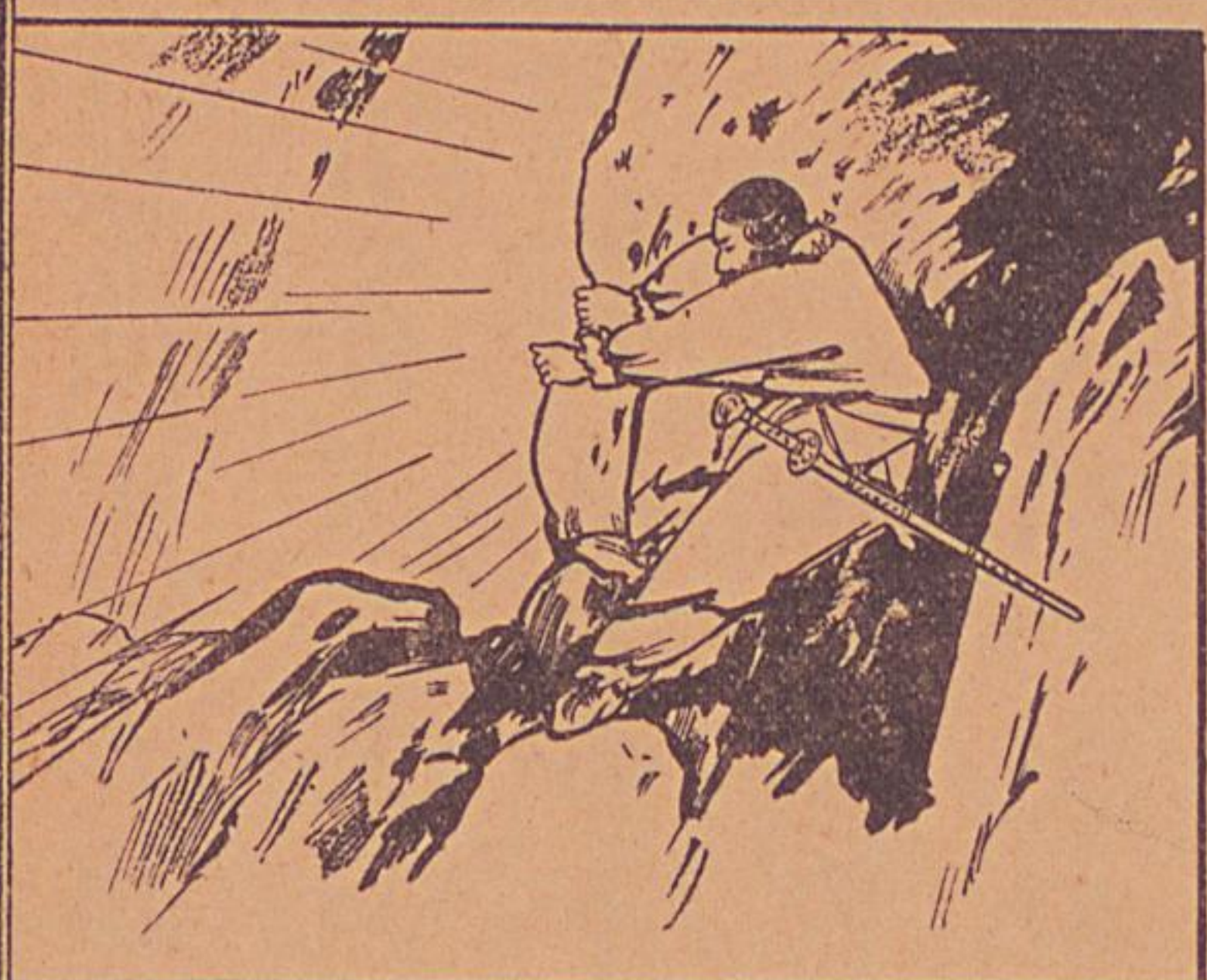
天岩

明

は學問もよく出来るし、運動も上手です。僕は自分よりえらい友達を大せいでいしめるのは、男らしくないと思います。

三 天の岩屋

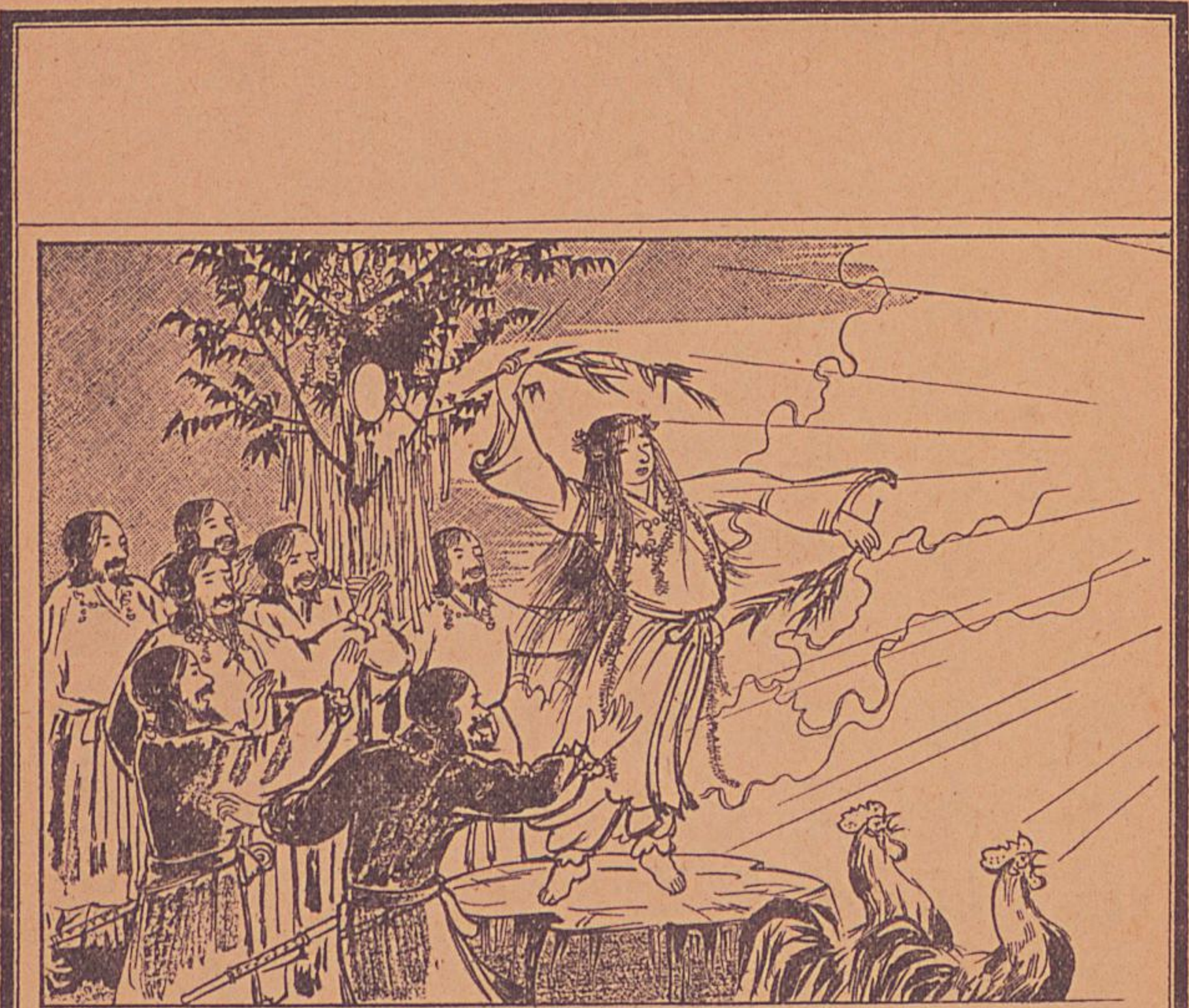
あまてらすおひのみや天照大神が天の岩屋へおはいりになり、岩戸をたてておこもりになりました。今まで明るかったせいか、いかにわかになりました。今までなつて、さまざまのわるものどもがさまざま



まのわるいことをします。

神様方は一同岩屋の前へお集りになって、  
まず大神の御心をおなぐさめ申そうと、か  
ぐらをおはじめになりました。

根こぎにした大きなさか  
きの木を立てて、其の枝に  
はかゞみや玉がかざって



あります。とこよの長  
鳴鳥なきどりとゆう大きなに  
わとりが大きなこえ  
でうたっています。そ  
の時、あめのうずめの  
みことがかずらをた  
すきにかけ、手にさ、  
のはを持って、おもし

動

外 御

ろいかぐらのまいをおまいになりました。  
 神様方がお笑いになるこえは、天も地も動  
 くかと思われるほどでした。  
 あまりおもしろそうなので、大神は少しは  
 かり岩戸を明けて、おのそきになりました。  
 天の手力男たぢからおのみこととゆう力の強い神様  
 がそれを、ごらんになり、大神の御手をお取  
 りになって、外へお出し申し上げました。そ

曜 記

内 繪葉

こでせかい中が又もとのように明るくな  
 ったと申します。

四 太郎の日記

四月二十一日 土曜 雨

今日から日記をつけることにしました。  
 学校からかえって見ると、フランススコ  
 君から繪葉書が来ていました。

この間内地からひこうきが二だいと

んで来ました。サイパン中の人達が心  
からかんげいしました。これは其の時  
の繪葉書です。

と書いてありました。

四月二十二日 日曜 晴

朝、おさらいをすましてから、島子とレモ  
ンを取りに行きました。帰りみちに、犬が  
ほえついてこまっていますと、よそのお

晴 歸

月 火

じさんが来て、其の犬を追いやって下さ  
いました。

四月二十三日 月曜 晴

四月二十四日 火曜 晴

ジョンが昨日から病気で、ごはんをたべ  
ませんので、學校に居ても心配でしたが  
歸って來ると、もうよくなっていて、尾を  
ふってむかえに出ました。

水 曇

四月二十五日 水曜 曇

つづり方の時間に、小鳥が教室の中へと  
びこみました。先生がまどをすっかり明  
けて、出しておやりになりました。

四月二十六日 木曜 雨

学校から歸って、あたらしい帳面と鉛筆  
とをかつて來ました。そうして書方のお  
けいこをしました。

木 帳面 鉛筆

金

四月二十七日 金曜 晴

となり村のおじさんがお出でになって、  
島子には繪本とりボン、僕には鉛筆と小  
刀をおみやげに下さいました。

五 大蛇たいぢ

あまてらすおのみかみ  
天照大神の弟の方に、すさのおのみことと  
申す神様がございました。ある時、いずも出雲の國  
のひの川のはたをお通りになりますと、川

五 大蛇たいぢ

上から箸が流れて来ました。みことは此の川上にも人がすんでいるにちがいないとお考えになって、だんく山おくへおはいにになりますと、おじいさんとおばあさんが一人の娘を中において泣いていました。「なぜ泣くか。」とおたずねになりますと、おじいさんが、「私どもにはもと娘が八人ございました。」



それを八岐の大蛇が来て、毎年一人づつ食べました。もう此の子一人になりましたのに、近い中に又其の大蛇が食べにまいります。」

頭 生 酒 待

「頭が八つ、尾が八つある大蛇で、目はほうずきのように赤く、せ中にはひのきや杉の木が生えています。」  
 「よし。其の大蛇をたいぢしてやろう。強い酒をたくさんつくれ。」  
 とおいつけになりました。  
 酒が出来ると、みことはそれを八つのおけに入れさせて、八岐の大蛇の来るのを待っ

飲 血切

ていらっしゃいました。  
 間もなく大蛇が来て、八つの頭を八つのおけに入れて、其の強い酒を飲みました。  
 飲みほして、大蛇がよいつぶれますと、みことはこしのつるぎをぬいて、大蛇をずたずたにお切りになりました。ひの川が血になって流れました。  
 尾をお切りになった時、つるぎのはがこぼ

れました。ふしぎに思って、尾をさいてごらんになりますと、つるぎが一ふり出ました。これはめずらしいつるぎだ。自分の物にしてはならぬとおぼしめして、天照大神へお上げになりました。

六弟の体操

元

体操

弟は今年五つです。よく太って、大そう元気です。毎日学校の体操を見て来ては、まねを

進

全

します。

「前へ進め。」

と言つては、両手をふつてあるきます。

「全体とまれ。」

と言つては、くるつと後を向いてとまりま  
す。そうしてすぐに手をあげます。

「ほうや、何するのです。とまれに手なんか  
あげて。」



横

呼

とゆうと、

「学校の生徒はみんなこうする。」

と言って、いばっています。

「手を横にあげ——あげ。」

と言っては、太った手を横にあげます。

「一二、一二。」

と呼唱をつづけて行く中に、横ばかりではなくて、上にあげたり、前に出したりします。

歩

「めっちゃめっちゃだね。」

とゆうと、

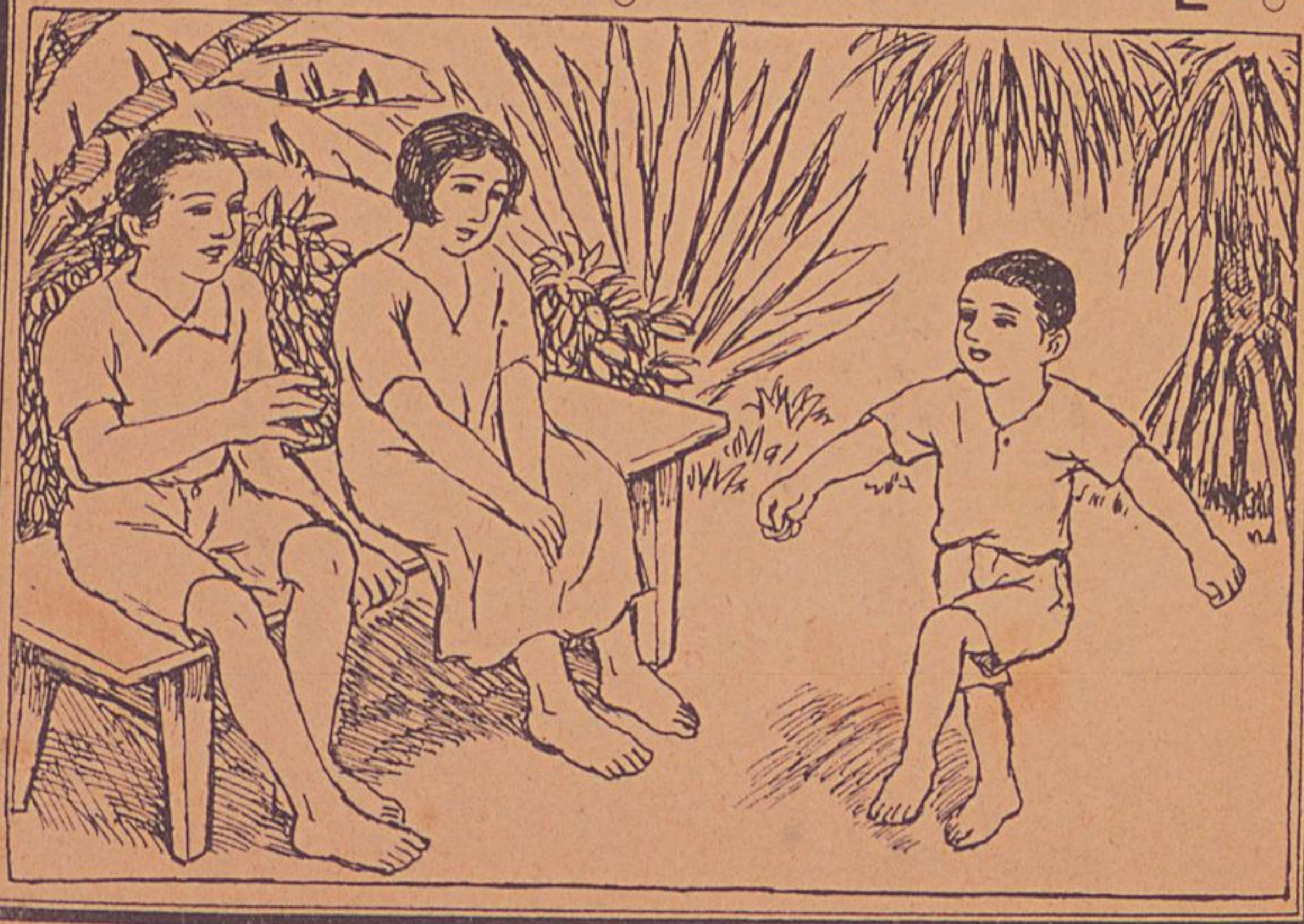
「生徒はみんなこうする。」

と言って聞きません。

「足ふみ進め。」

と言つては、「前へ進め。」

と同じように歩いて



行きます。

「ほうや、足ふみではありませんか。」

とゆうと、

「それでも進めだもの。」

とりくつを言います。

弟は毎日こんな事をして遊んで居ますが、  
其の体操には誰でも笑わされます。

誰

七種痘



「先生、種痘をなせするのですか。  
天然痘にかゝらないためです。」

「天然痘とゆうのは  
何ですか。」

「天然痘は大へんう  
つりやすい病氣で  
す。昔は此の病氣の  
ためにあばたが出

来て、みにくい顔になった人がせかい中にたくさんありました。」  
 「それでは天然痘にかゝると、誰でもあはたが出来るのですか。」  
 「え、それはかるくすんだ人で、おもければ死んでしまいます。」  
 「まあ、おそろしい病氣ですね。種痘をすれば天然痘にはかゝりませんか。」

「種痘をした人はめったに天然痘にかゝりません。かゝってもごくかるくてすみます。」

それから先生は、種痘をはつめいした人の話や、種痘のきそくなどのお話を、いろいろして下さいました。

八 美シイ心

今カラ二十年バカリ前、私ハ南洋貿易會社

會社

船 無 半 無 實

ノ船デ友達ト二人テ、アグリガン島ニワタ  
リマシタ。アグリガンハ其ノコロ無人島テ  
シタ。  
船ハ三月目ニ又來ルハズデシタガ來マセ  
ン。四月、五月、半年タツテモマダ來マセン。サ  
ミシイノハガマンモ出來マスガ、食物ガ無  
クナツテ來タノニハコマリマシタ。  
シバラクハサメノ肉ヤ椰子ノ實ヲ食べテ

外 決

午後

居マシタガ、コレデハナガク生キテ居ルコ  
トハ出來マセン。コノ上船ガ來ナケレバ、死  
ヌヨリ外ハアリマセン。ソコデ命ガケニナ  
ツテ、小サナボートデ、パガン島ニワタロウ  
ト決心シマシタ。パガンマデハ四十五哩、今  
カラ思ウトアブナイコトデシタ。  
アル日、ボートニ椰子ノ實ヲタタサンツミ  
コミ、小サナホヲマイテ、二人ハ午後三時、ゴ

送前着々

口出カケマシタ。  
一夜南へ南へト吹キ  
送ラレテ午前十時ゴ  
ロ。パガンニ着クコト  
ガ出来マシタ。パガン  
ノ人々ハオドロキカ  
ツヨロコソデクレマ  
シタ。



國五  
國五

家族

情

助

民

人々ノシンセツニ二人ハ生キカエツタ氣  
持ニナリマシタ。中ニモカナカノ七家族ガ  
コトニ同情シテイロクモテナシテクレ  
マシタ。

私ハ此ノ時ホトウレシカッタコトハアリ  
マセン。死ヌトカクゴシタ命ハ助カルシ。知  
ラナイ人カラハシンセツニサレルノデ、シ  
ミぐウレシク思イマシタ。私ハ此ノ島民

ノ美シイ心ヲ何時ニナツテモワスレルコトハ出来マセン。

九 熊襲征伐

者 征伐

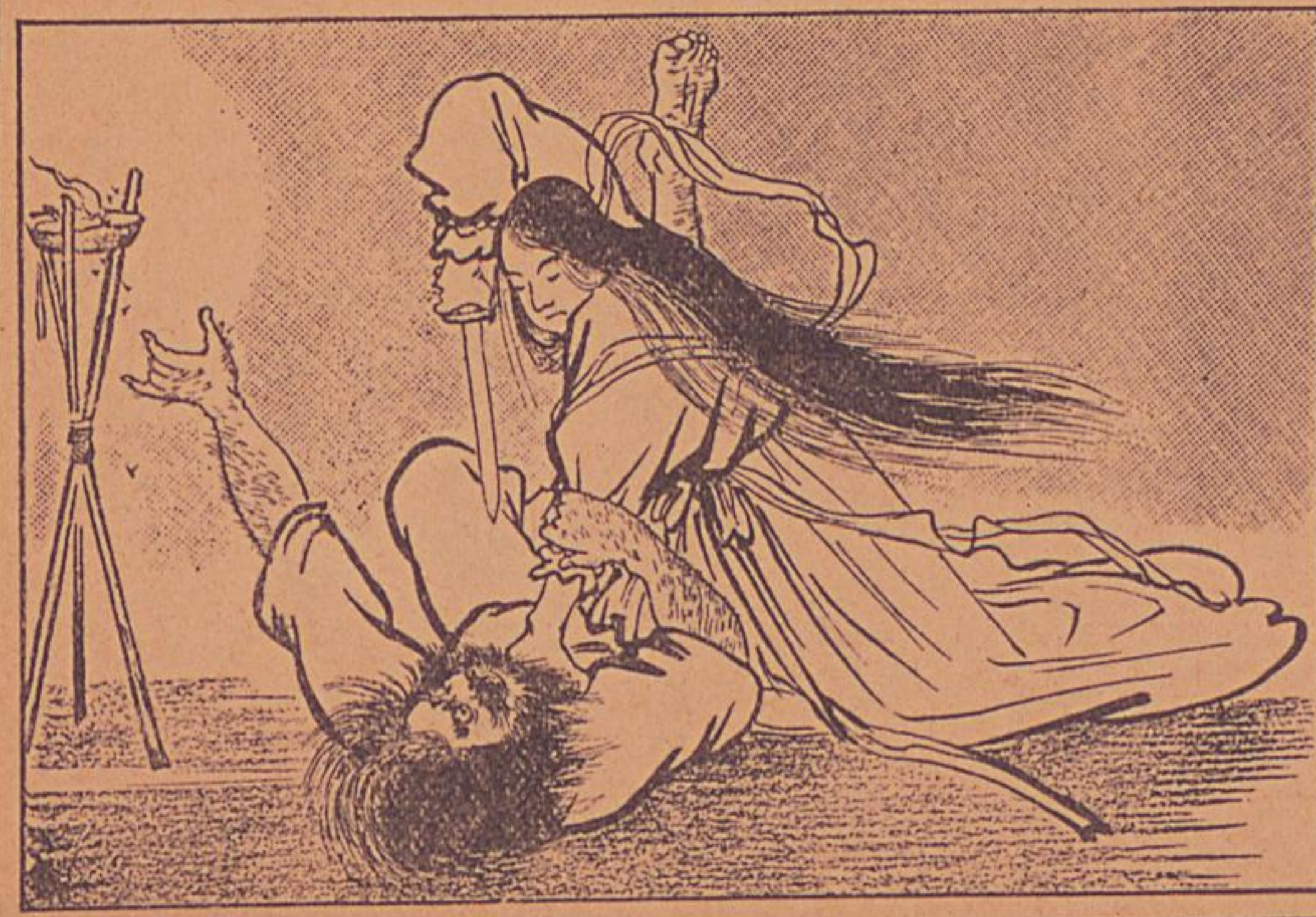
昔、熊襲くまそのかしらに、川上のたけるとゆう者があつて、天皇のおうせにしたがいませんでした。天皇は日本武尊やまとたけるのみことに、これを征伐せよとおうせられました。尊は其のころ、やまとおぐなとゆう御名で、

新 造

御年は僅わずかに十六でいらっしやいましたが、いさみ立ってお出かけになりました。お着きになりますと間もなく、たけるが新しい家を造つて、人々を集めて、其の祝をしました。尊はかみをといひ、女のすがたになり、つるぎをふところにかくして、其の家の中へおはいりになりました。大ぜいの女どもにまじつていらっしやい

眠

ますと、たけるは尊を見つけて、自分のそばへ呼びました。  
 夜がふけて、人々は歸りました。たけるも酒によつて眠りました。此の時尊はふところのつるぎを出して、たけるのむねをおつきになりました。



なみくの者なら、「あつとさけんで死にましようが、たけるも熊襲のかしらだけあつて、  
 「しばらくお待ち下さい。申したいことがあります。」  
 とい、ました。尊は手をおゆるめになりました。  
 「あなたはどなたでいらっしゃいます。」

都居

息

「われは天皇の皇子やまとおぐな。」

「あゝ、たゞ人ではおありなさらなかつた。自分にまさる者はないので、たけると申して居りましたが、都には強いお方がおありになつた。今御名をさし上げます。日本武皇子と申したまえ。」

「と、息がたえました。これから後、やまとおぐなの皇子を、日本武尊と申し上げる。」

ことになりました。

十 わたし舟のおきやく

「あゝ、しまった。海の中へめがねをおとしました。」

せんどう

「では、こゝへしるしをつけておいて、後でさがしましょう。」

「と、炭のかけで、舟べりに丸をつけま。」



逃

した。

十一波

逃げるわたしの

後追いかけて、

大波小波が

ついて来る。

大波小波の

いく後つけて、



十一波

三十八

國五

貝面

わたしはまたも

追っていく。

波はわたしの

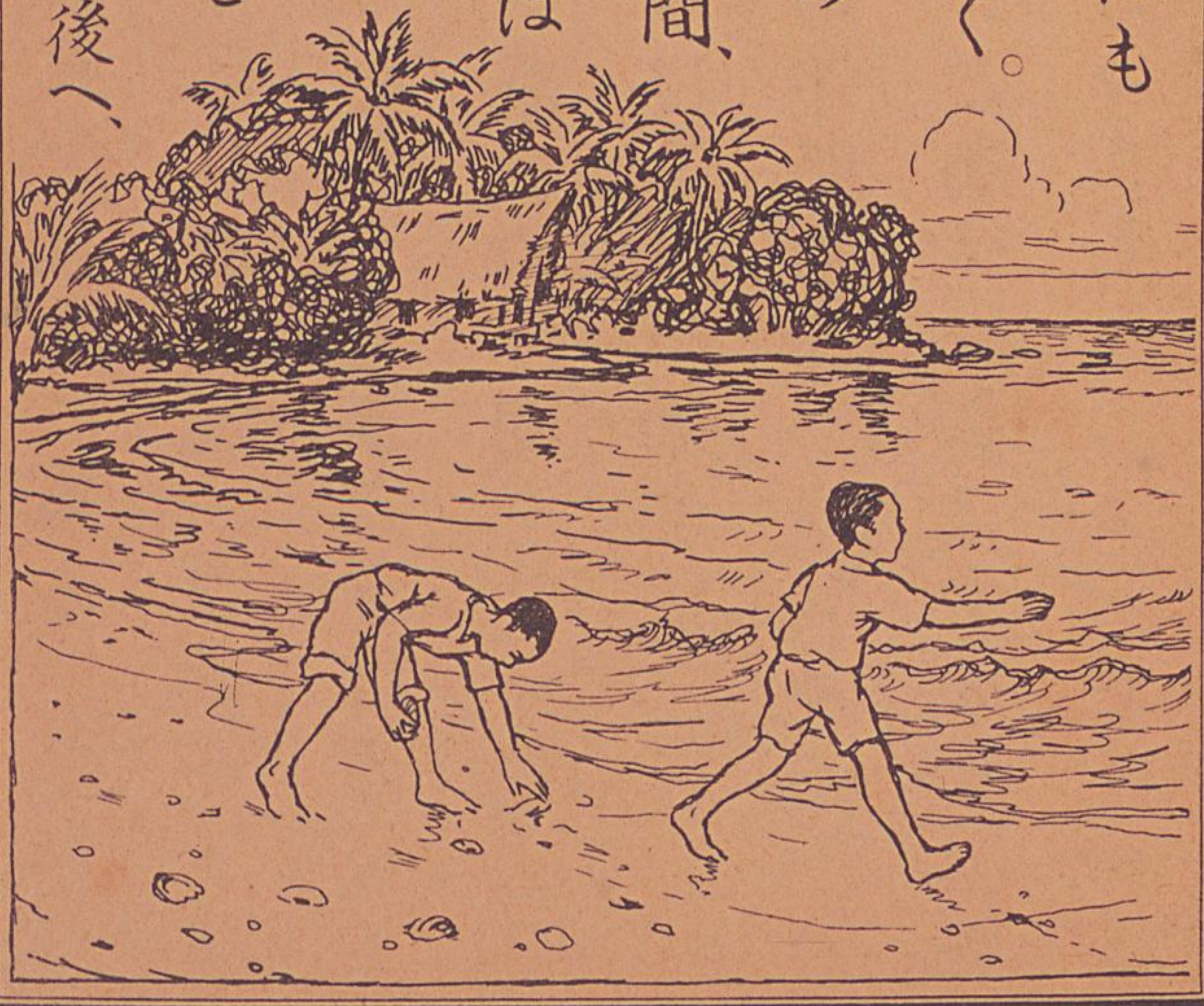
遊びの仲間、

何時もはまへは

面白い。

わたしが貝を

ひろった後へ、



十一波

三十九

大波小波が置きに来る。

大波小波のならした砂へ、

わたしが字を書き穴をほる。

波はわたしの遊びの仲間、

何時もはまべは面白い。

十二 南洋群島

私達のすんでいる南洋群島は、フィリッピン群島の東にあつて、南はニューギニヤ島

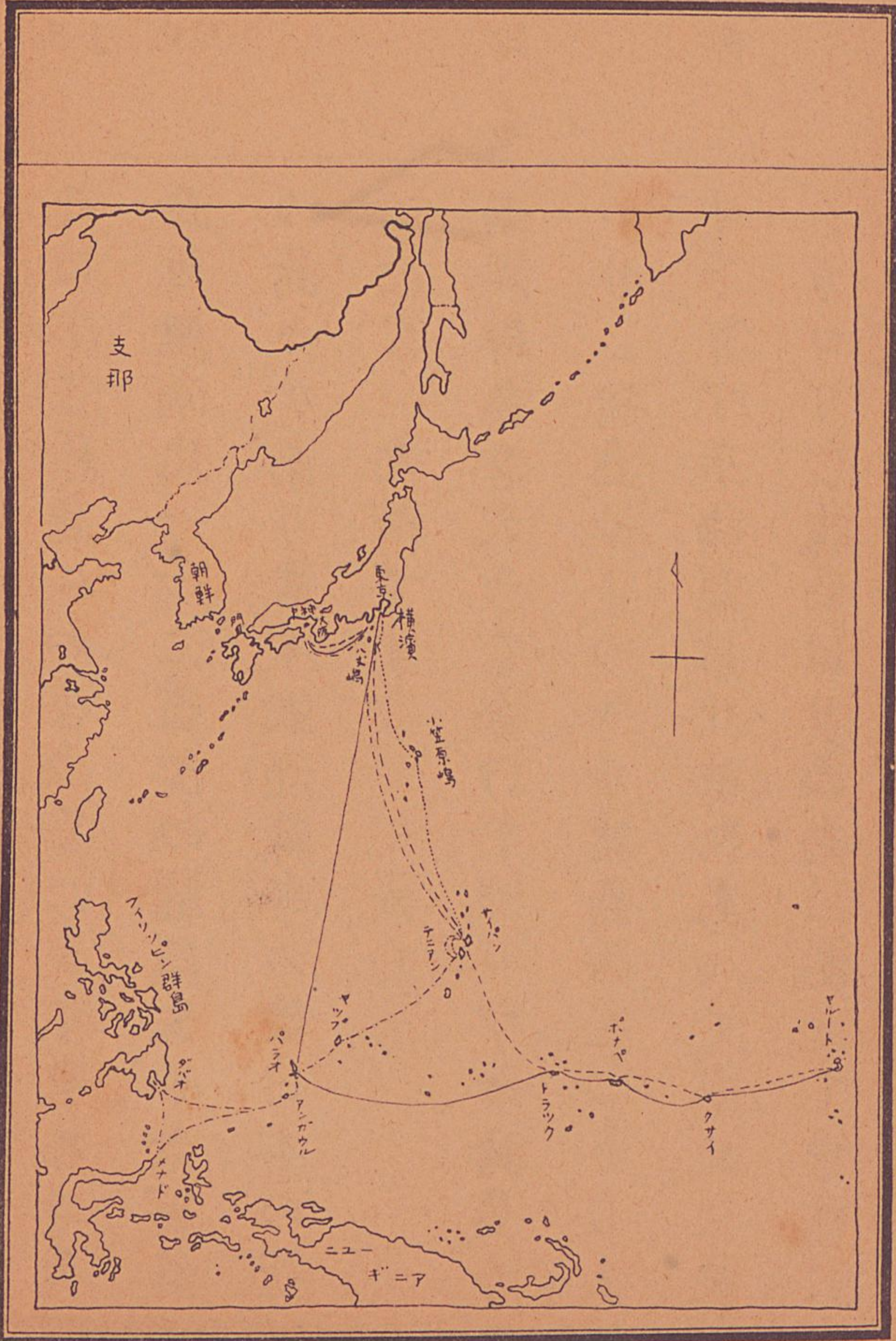
置 砂 群

西千 北小

北は小笠原島おがさわらに向合っています。東西二千五百哩、南北一千二百哩の間に、大小六百餘の島々があります。歐洲戦争おうしやうせんそうの後、日本の統治とちになつた所です。

南洋群島を大きく分けて、マリアナ諸島、カロリン諸島、マーシャル諸島の三つとします。マリアナ諸島は北部にあつて南北に長く、カロリン諸島は其の南にあつて東西に

諸 部



豆

長くつゞいています。マーシャル諸島は東部にあって、多くの島が豆をまいたようにあらばっています。

気温は年中高いがいつも風やスコールおんがありますので、しのぎにくいことはありません。

万(萬)

南洋群島にはやく七万の人がすんで居ます。其の中島民が五万ほどあります。島々に

言

によつて言葉や風俗がちがいます。

産物

南洋群島はどこでも椰子がしげつていて、コブラは産物のおもなものです。其のほかアングウル島の燐礦やサイパン島の砂糖もまた名高いものです。

砂糖

役廳所

パラオ諸島のコロールは南洋群島の中心地で、南洋廳をはじめ多くの役所や學校などがあります。サイパン島のガラパンもに

商業

ぎやかな町で、商業がさかんです。

十三 雨

一 降ツタ雨

降

降ツタ雨ハドウナルデシヨウ。

屋根ニ降ツタノハ、トイカラタンクニハイ

飲料

ツテ、人ノ飲料ニナルノモアリマス。

地面ニ降ツタノハ、ヒクイ方へヒクイ方へ

小

ト流レテ、ソレガ集ツテ小川トナリ、大川ト

蒸 泉

ナリ、流レくくテ海ニハイリマス。  
雨水ハタバコウシテ流レルバカリテハア  
リマセン。地ノ中ニシミコンテ、井戸水ヤ泉  
ノモトニナルノモアリ、目ニ見エナイ水蒸  
氣ニナツテ、空へ歸ルノモアルソウデス。

二 雨ノイタズラ

雨が強く降ルト、美シイ花モ、小サナ草モ、ヒ  
ドクイタメラレマス。屋根ニ小サナ穴デモ

下

アルト、ソコカラハイツテ、屋根ウラヲツタ  
ツテ、ポタリくくトオチマス。  
地面ヲ流レル時ハ、ヤワラカナ土ヲクズシ  
テ、流シテ行キマス。川ニ集ルト、大ヘンナイ  
キオイデ、岩ニブツカッタリ、ガケニツキア  
タツタリシテ、モロイ所ヲミンナコワシテ  
シマイマス。大キナ石デモ、ラクくくトコロ  
バシテ、川下へ持ツテ行キマス。

平ナ所ニ行クト、イキオイガノロクナルノ  
テ、持ッテ來タ石モ、砂モ、ドロモ、ソコニシズ  
メテ行ッテシマイマス。

十四 仁徳天皇

殿或 下代第

日本第十六代仁徳天皇は、都を浪速なみせにうつ  
して、天下をおおさめになりました。  
天皇は大そうおなさけぶかいお方でした。  
或日天皇が高い御殿に上って、四方をこら

近 民

んになりますと、ごはんをたく時分である  
のに、民の家からけむりが一こうあがりま  
せん。天皇は、「これは近年五穀ごこくがよく出来な  
かったので、人民はごはんをたくことが出  
来ないのである。」とおぼしめして、其の後  
三年の間、租税そぜいをおゆるしになりました。  
それから豊年がつまきました。人民は皆ゆ  
たかになって、民の家から立ちのぼるけむ

豊

りもさかんになりました。天皇は之をござらんになって、

「われはゆたかな身になった。」

と、大そうおよろこびになりました。しかし

御殿は其の間にあ  
れそんじて、雨がも  
るほどになりました  
た。人民は此の事を



之 身

願

もれ聞いて、

「まことにおそれおういこ

とだ。おたてかえを御願

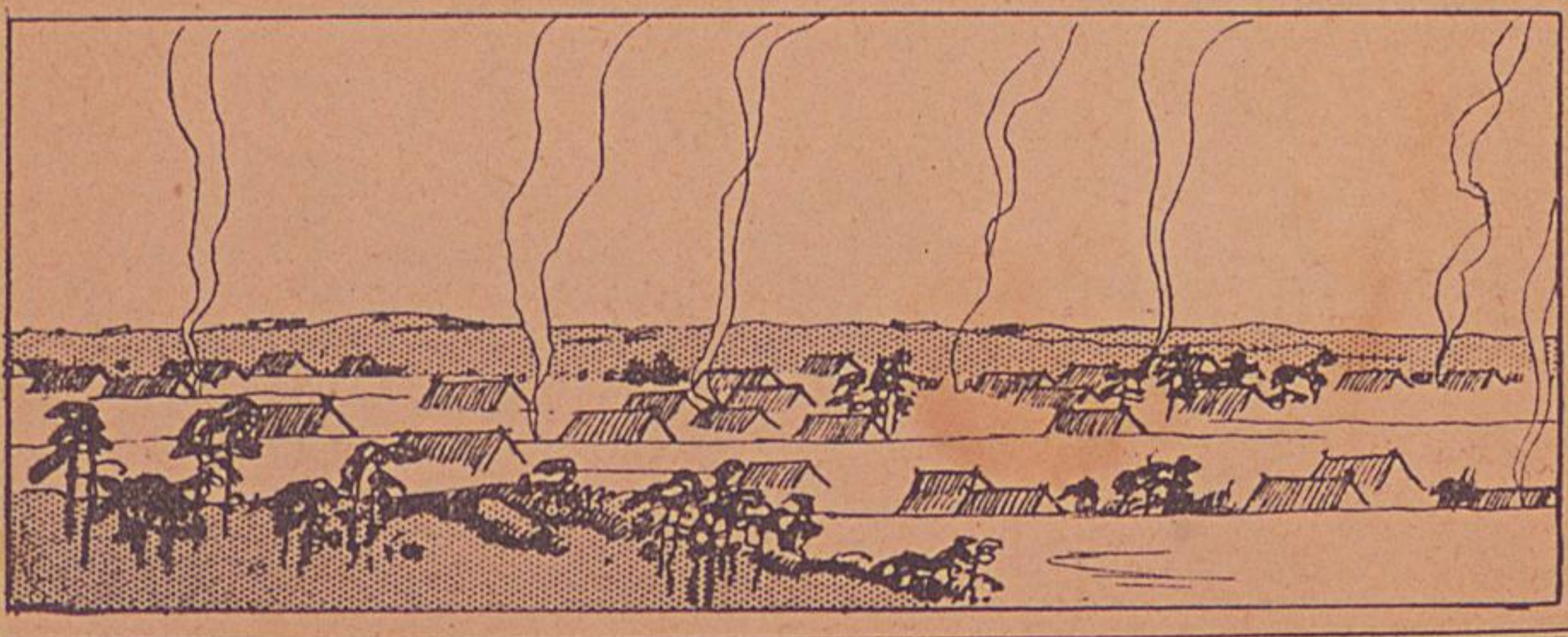
い  
申そう。」

とそうだんして、天皇に願

い  
出ました。けれども御許があ

りません。其の後もたび

び  
願って、三年目にようく御



若老

宮

許をうけました。

人民は大そよろこんで、自分の家を造る  
ように、老人も若者も朝から晩まで一しよ  
うけんめいにはたらいて、しばらくの間に  
新しい御殿を造り上げました。

十五 日本三景

日本の國には、けしきのよい所がたくさん  
ありますが、松島・天の橋立・宮島の三つを、昔

海 景

から日本三景と申します。

松島は大小二三百の島が、海  
上十四五キロメートルの間  
にちらばっていて、島とゆう  
島には、枝ぶりのよい松がし  
げっています。あたりの高い  
所からもながめますが、多く  
は舟にのって、島の間を通っ





見

景色

細



十五 日本三景

て見物します。はれた日、月の夜、ゆきの朝、何時見てもよい景色です。

天の橋立は海中へつき出た細長い洲<sup>すずみ</sup>で、長さは四キロメートル、はゞは八九十メートル。其の洲の白い砂の上に、青い松が一面に立っていて、長

五十四

國五

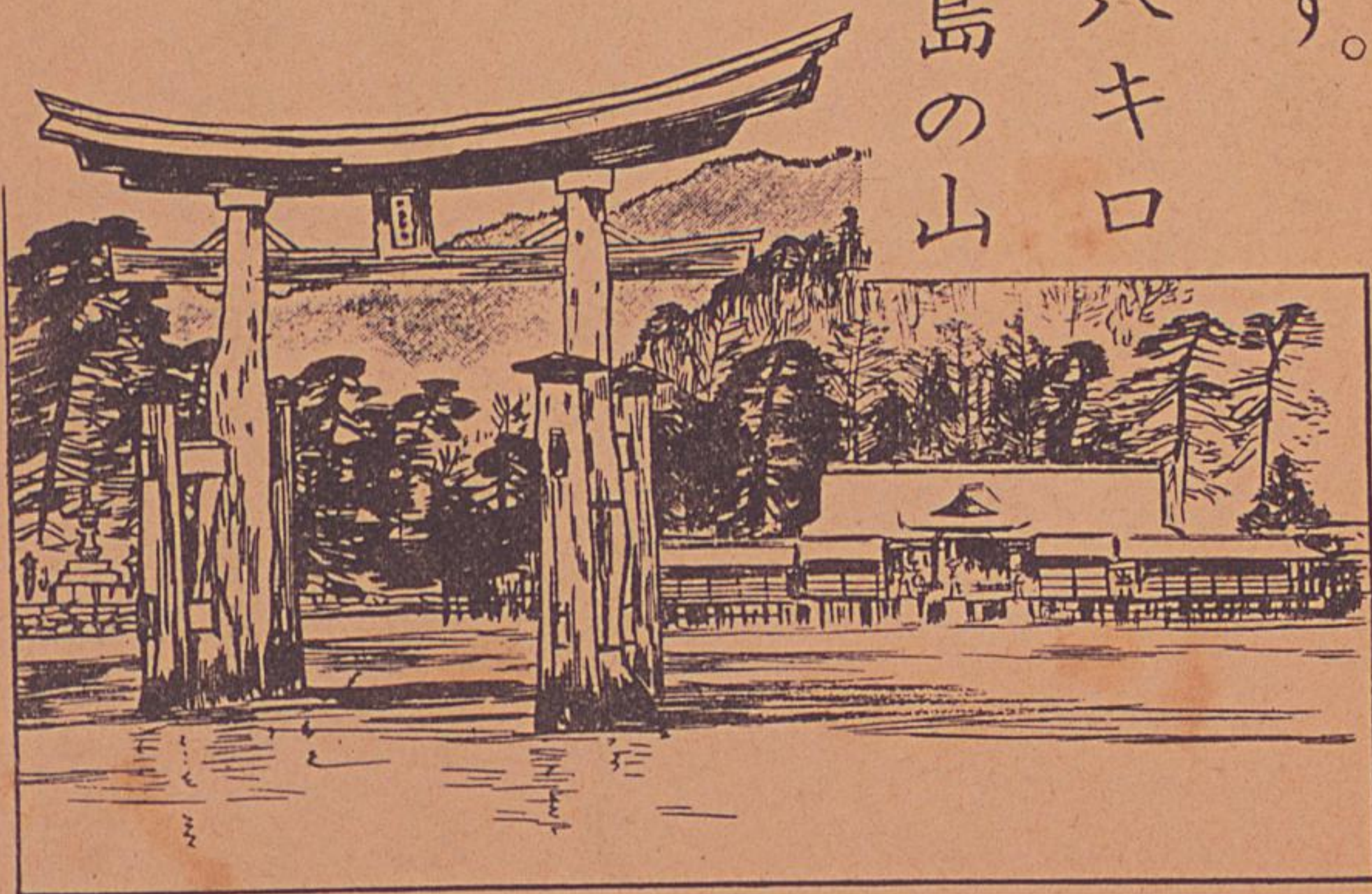
鹿

神

い橋のように見えます。

宮島はまわりが二十八キロメートルもある島で、島の山には鹿がたくさんすんでいます。

島の東北に嚴島神社<sup>いつくしま</sup>があります。しゅぬりの社殿が山のみどり



十五 日本三景

五十五

浮  
 を後にして、大そうきれいに見えます。ことに潮のみちた時は、社殿や廻廊が海の中に浮いて、お話にある龍宮はこれかと思われ  
 ます。社前の海に、日本一の大鳥居があります。

十六 虹

あれく、虹が立っている。  
 もりも小山も下に見て、

筆

向ふの畑から大空の  
 雲までとどく弓のなり。  
 だれがかけたか、虹の橋。  
 さてく、虹は美しい。  
 赤・黄みどりやむらさきと、  
 七つの色をならばせて、  
 空の繪絹へ一筆に、

だれがかいたか、虹の橋。

さてく、虹は面白い。

雨のはれ間にちよと出て、

用よありそうに天と地の

遠きをつなぐ雲の上。

だれがわたるか、虹の橋。

寺

あれく、虹がきえて行く。

あのあざやかな色どりも

しだいにくにうすくなり、

小山の方はもう見えぬ。

だれがけすのか、虹の橋。

十七 奈良

奈良ならは昔都のあった所です。今もお宮やお

寺のりっぱなのがあります。

寺

私は奈良に行つて、おどろいた物が二つありました。一つは東大寺の大佛ぶつで、大きな金の佛ほとけ様です。すわつていらつしやる高さたかさが十六メートル、顔の長さが四メートル



國五

指

一メートル八五、耳の長さが二メートル五八、目の長さが一メートル一八、手のひらの長さが一メートル七〇、中指の長さが一メートル五二あります。

此の大きな佛様がおどろの中なかにまつてあるのですから、其のおどろは又おどろくほど大きなものです。

もう一つは春日神社かすがの鹿かです。二千頭ふたにせんもい

るとゆう大鹿  
小鹿が遊んで  
いて、おまいり  
する人の後か  
らついて來ま  
す。菓子を買っ  
てやると、たく  
さん集って來ます。ほんとうにかわいも



買

のです。

十八 郵便

弟「にいさん、葉書を入れて來ました。あの葉書は何時ごろピレイ君の所へ着きますか。」

書

兄「四日目の朝か、お書には着くでしょう。」  
弟「どうして行くのですか。」

郵便局

兄「郵便局の人が汽船につんで送ってくれ

枚 錢 厘

るのです。

弟「たゞで送ってくれるのですか。」

兄「いえ、郵便料がいります。お前はあの葉書が一枚いくらするか知っているでしょう。」

弟「一錢五厘です。」

兄「そうです。それが郵便料です。だから繪葉書には一錢五厘の切手をはらなければ

封書

重

ならないのです。」

弟「あ、わかりました。封書に切手をはるのも同じわけですね。」

兄「そうです。」

弟「封書には三錢の切手をはればよいのでしよう。」

兄「そうです。しかし十五グラムより重いときは、郵便料が高くなります。」

十九 手紙

一 手紙の書方

手紙を書くのは、むずかしいものではありません。

思うことをよくわかるように、書けばよいのです。假名で書いてもさしつかえありません。たゞ、ぞんざいな言葉をつかったり、不作法な書きぶりをしてはいけません。

不作法

舞

二 病氣見舞

様子

ホセイ君、御病氣はその後どんな御様子ですか。

妹

此の前の日曜日には、君が遊びに來てくれるとゆうので、僕も妹も朝からたのしみにして待っていましたよ。月曜日に學校に行ってみると、君は休んでいられるので、

急  
入院

丈夫

どうしたのかと思つて弟さんに  
聞いたら、急に熱あつが出て、入院され  
たとゆう話で、僕はどんなにおど  
ろいたでしよう。くみの人達も皆  
心配していましたよ。  
君はふだん丈夫だから、すぐなお  
るでしようが、何分わるい時節だ  
から、よく氣をつけて、早く元氣に

返  
紙

なつて下さい。

今度の日曜には、妹と二人で、御見  
舞に行くつもりです。

八月十五日

トマス

ホセイ君

三 同じく返事

御手紙ありがとうございました。  
此の前の日曜には、おうかゞいす



約束

熱

悪

十九 手紙

る約束で、ことに弟は前日からたのしみにしていましたが、土曜の夜中から、急に熱が出て苦しくなり、夜の明けけるのを待ちかねて醫者に來てもらったら、<sup>悪い</sup>病氣ではないが、熱が高いし、それに少しおなかもよくないから、ようじんのために入院した方がよからう。

七十

早速

食

退

十九 手紙

とのことで、早速入院しました。今日はよほど熱もひいて気分もよく、食物のあじもどうやらわかるようになりました。此の分なら近い中に退院することが出来るだろうと思います。くみの人達にもよろしく言ってお下さい。

七十一

八月十九日

ホセイ

トマス君

二十 父の教

昔或人が大ぜいの子どもを集めて、矢を一  
本づつわたして「之をおつてみよ。」と言いま  
した。一同はやすくとそれをおつてしま  
いました。

今度は兄弟のかずだけの矢を一たばにし

仲 教

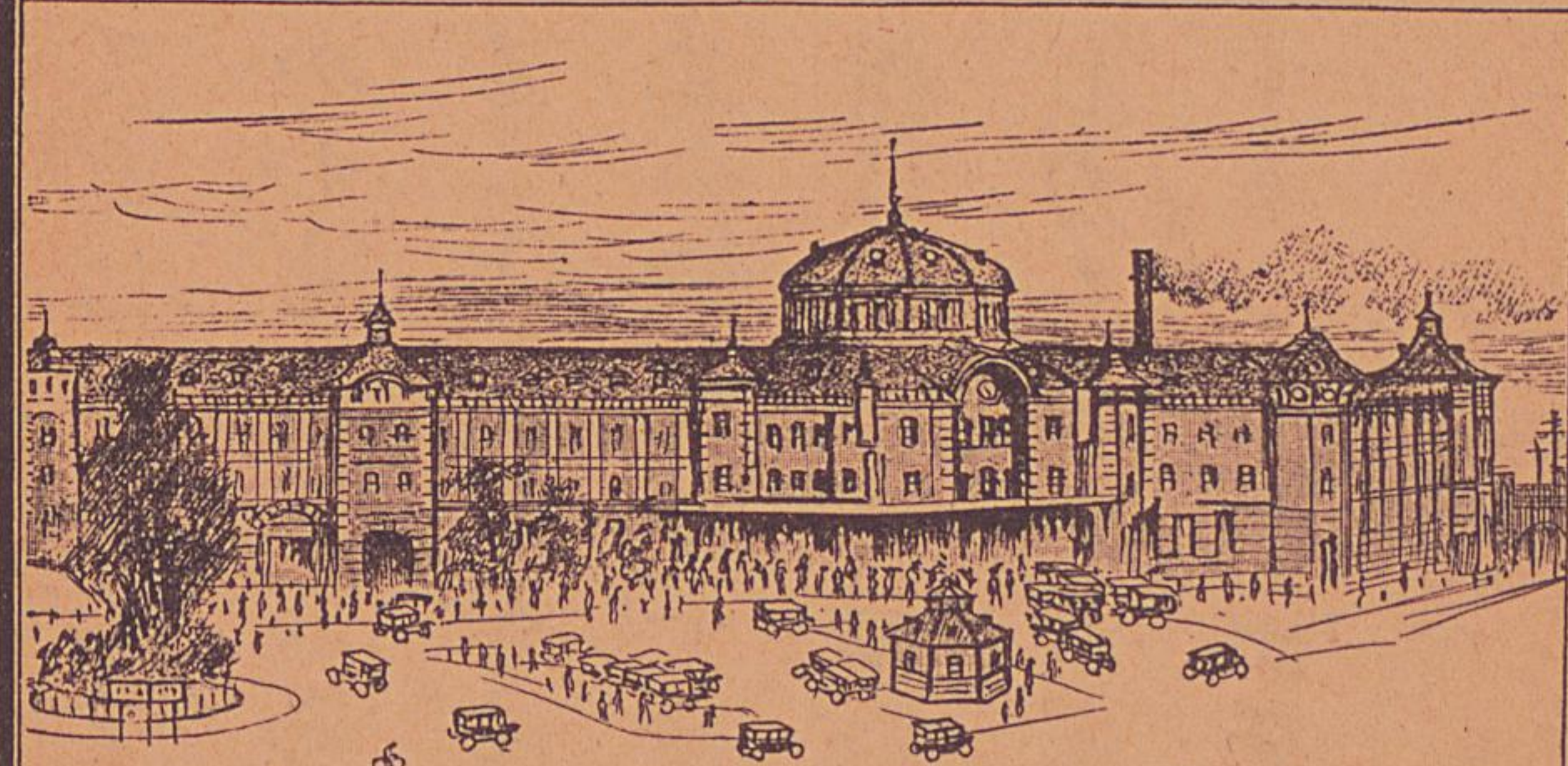
て「之はどうだ」と言つてわたししましたので、  
かわるぐおろうとしましたが誰にもお  
ることが出来ませんでした。

其の時父は「一つづつなら弱よわいものでも、一  
所にするはたらと強い。お前達兄弟も互たがひに仲よく  
し、力を合わせて働けば、此の家をさかんに  
することが出来る。」と教えました。

二十一 東京停車場

停車場  
宮城

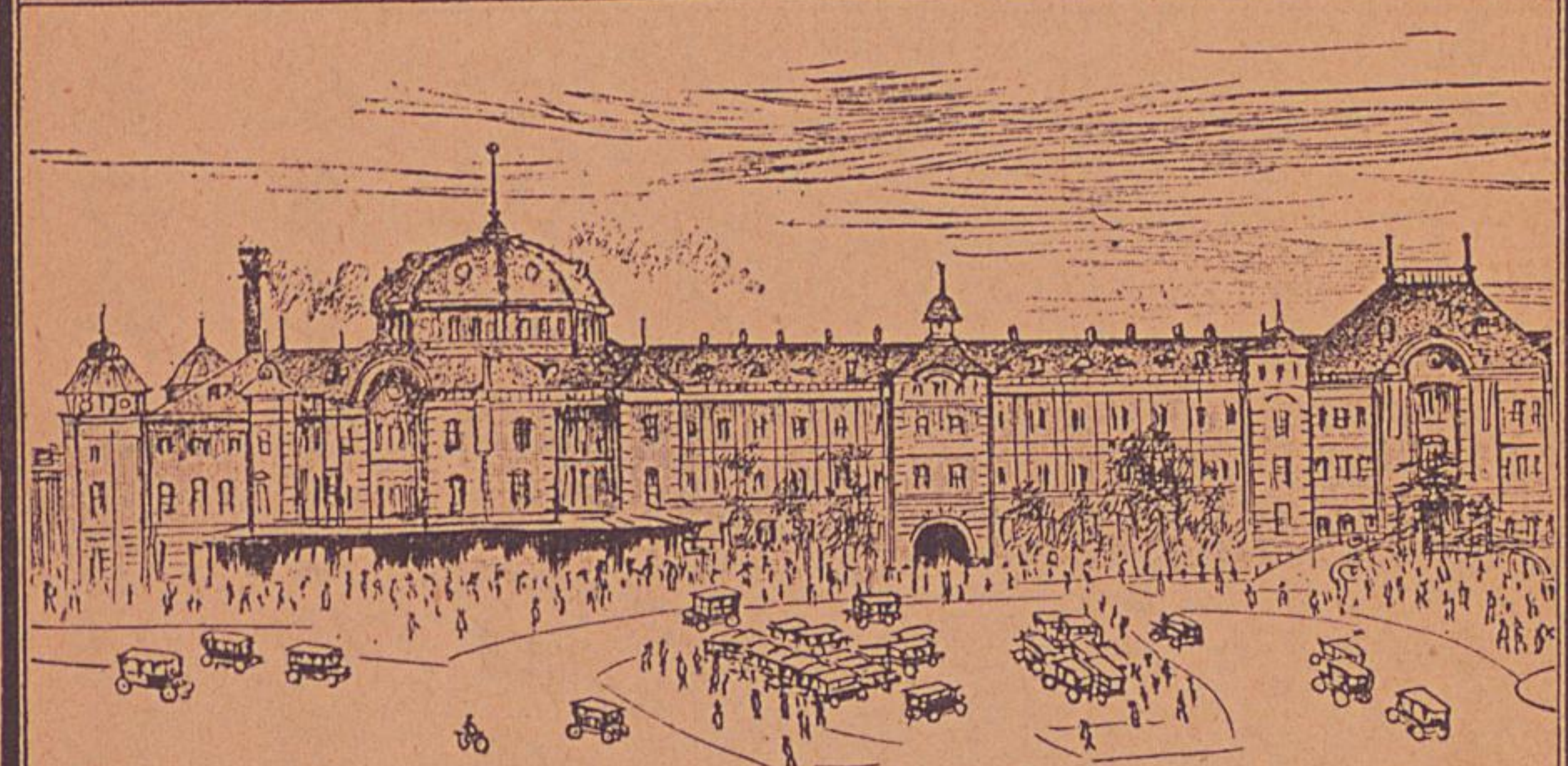
帝用



東京停車場は東洋第一の大停車場で、宮城の東にあります。赤れんがの三階造で、間口が三百三十五メートルばかりあります。向って右が入口、左が出口で、まんなかが帝室用になっています。

七十四 東京停車場

左右  
外  
央  
店  
堂



停車場の階上には、役所もホテルもあります。階下の入口には、左右に大きな待合室があつて、此の外に中央郵便局の分室もあれば、<sup>かえ</sup>兩替店や、いろ／＼の賣店<sup>ばい</sup>もあります。又洗面所<sup>せん</sup>もあれば、食堂もあります。

七十五 東京停車場

電  
發着  
乗降

此の停車場は汽車や電車の發着がたえま  
がなく、毎日何万とゆう人が乗降りするの  
で、入口や出口の前には、いつも自動車がた  
くさん居ます。

二十二 鳥の巢

小さな木のしげった間から、小鳥がとび出  
しました。行って見ると、鳥の巢があります。  
草や木の葉をまぜて作って、内がわには毛

親



がしいてありました。  
四五日たってから見る  
と、巢の中に卵が五つは  
いっていました。取ろう  
かと思いましたが、親鳥  
がかわいそうだからやめました。  
三度目に行った時にはもう卵がかえって、  
ひなになっていました。ひなのからだには

寒 度

まだ羽が少いので、寒そうでした。

其の後も度々のぞいて見ましたが、見る度に大きくなって、羽もだんく生えそろうて、かわいらしい小鳥になって行きます。そうして一番しまいに見た時には、巣ばかり残っていました。親鳥につれられて、巣立ちをしたのでしょう。

二十三 八幡太郎

残

八幡太郎義家が或日安倍宗任をつれて廣い野原を通りますと、狐が一匹とんで出ました。義家はせ中のうつぼから、かりまたをぬいて狐を追っかけました。いころすのもかわいそうだと思つて、兩耳の間をねらつて、頭の上をすれくにいました。矢は狐の鼻の先の地面につっ立つて、狐はころりとおれました。

かけよって見て、宗任が

「矢はあたって居りませぬのに、狐は死んで居ります。」

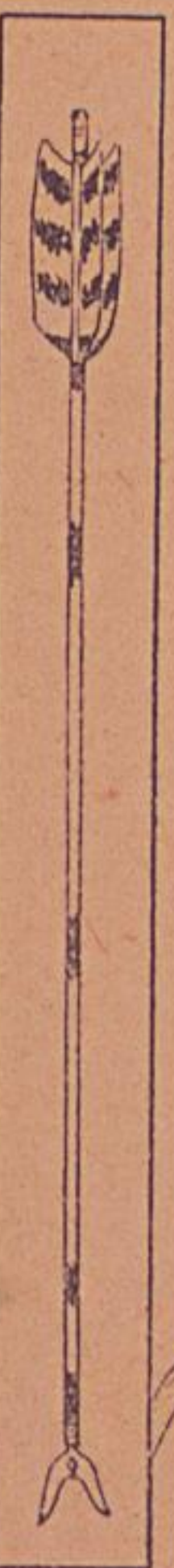
とゆうと、義家が

「びっくりしてたおれたのだ。ほっておけ、今に生きかえる。」

と言いました。

さて宗任がかりまたをぬき取って、義家に

かえしますと、義家はせ  
中をくるりとむけて、う  
つぼへさゝせました。か  
りまたは、矢じりがつば  
めの尾のようにわれた。  
大そうするどい矢で、宗  
任はつい此の間、義家に  
こうさんした敵



の大將なのです。

「あぶないことだ。もし宗任に悪い心があったら。」

と、義家の家來どもはひやくしたといまます。

二十四 火

人ハ火デ物ヲニタリ、焼イタリシテ食べマ  
ス。夜ニナレバ火ヲトモシマス。寒イ時ニハ

使用

火ニアタリマス。又イロくナキカイヲ動  
カスニモ火ノカラ用イマス。火ヲ使ウコト  
ノ出來ルノハ人バカリデス。鳥ヤ獸ケモハ火ヲ  
使ウコトヲ知リマセン。

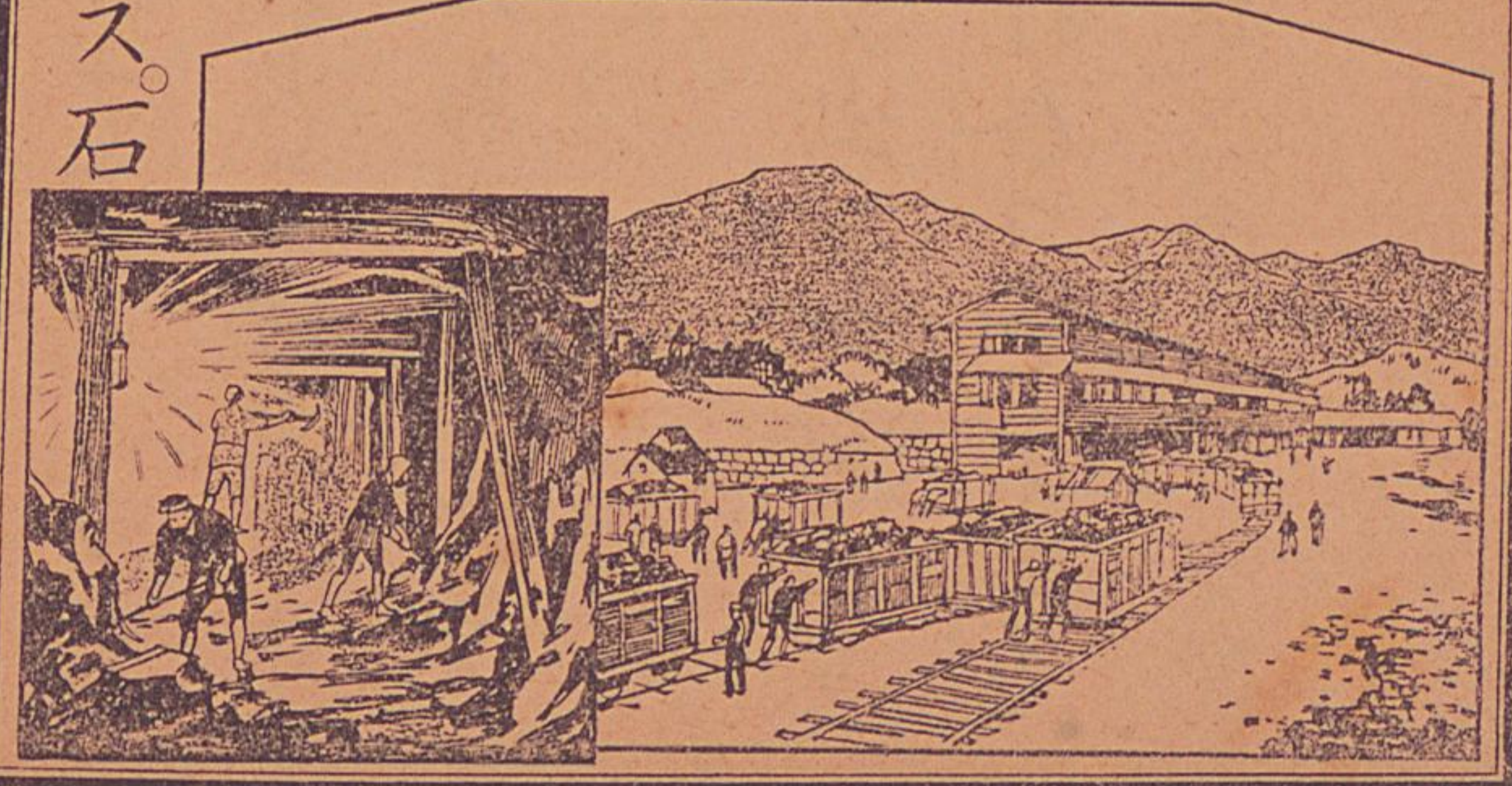
打

昔ハ木ト木ヲコスツテ火ヲ出シマシタガ、  
ソレカラ後ニハ、石ト金ヲ打合ワセテ出ス  
ヨウニナリマシタ。今イマデハマツチトユウ便  
利ナ物が出來テイマス。

便利

炭 石 植

火バチナドニ入レル炭ハ、  
木ヲ燒イテコシラエタモ  
ノデス。ソレユエ木炭トイ  
イマス。石炭ハ大昔生エテ  
イタ植物ガ土ノ中ニウズ  
マツテ出来タモノデス。石  
ノヨウニカタクナツテイ  
マスカラ、石炭トユウノデス。石



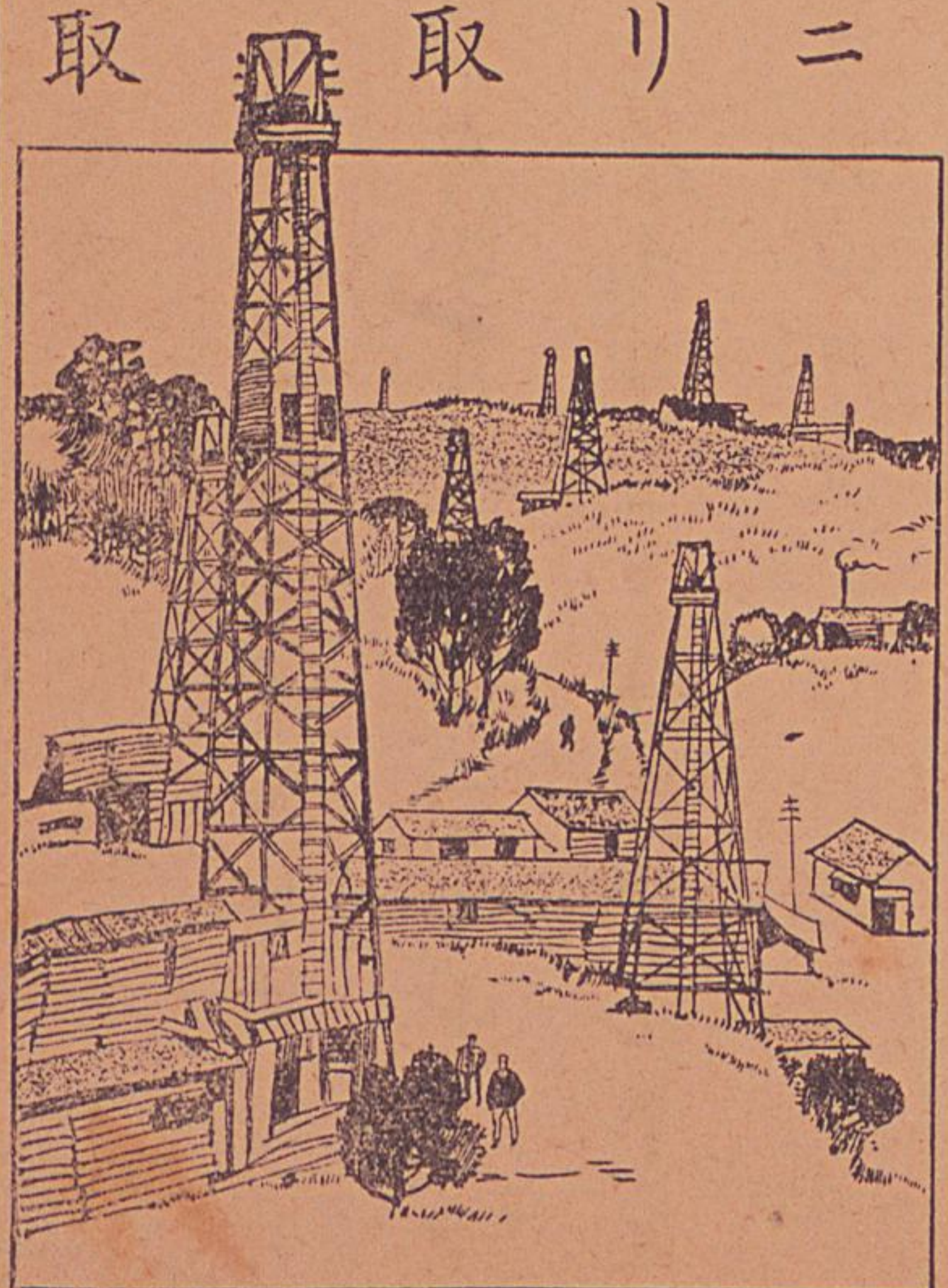
二十四火

八十四

國五

油

炭ノ火ノカハ木炭ヨリモズツト強イノデ、  
汽車・汽船ヤ其ノ外イロクナキカイヲ動  
カスニハオモニ石炭ヲ使イマス。  
火ヲトボス油ニ  
モイロクアリ  
マス。植物カラ取  
ツタモノモア  
リ、魚ヤ獸カラ取



二十四火

八十五



油

ツタモノモアリマス。

ランプニ用イルノハ石油トイ、マス。コレハ地ノ中カラワキ出ルモノデ、ワキ出タママノハニゴツテイルガ、ヨク仕上ゲルト、スキ通ツタ油ニナルノデス。

二十五 古机

私は古机でございます。私が此の學校へま  
いりましてから、十五年になります。其の間

古

にいろくな子どもを見ました。

あくびやわき見ばかりして、何もおほえな  
い子どももございました。しせいがよくて、  
しじゅう氣をつけていて、何でもはつきり  
答える子どももございました。度々休んだ  
り、ちこくしたりする子どももございまし  
たが、一日も休まないで、よく勉強する子ど  
ももございました。

勉強

學校でいつもほめられた子どもは、今はりっぱな人になっています。先生にしかられたり、友達にきらわれた子どもは、大てい役にならないう人になってしまいました。私は一体子どもがすきでございませう。けれども長い間に、どうしてもすきになれない子どもが五六人ございました。私の中から、こんなにくらついて、こんなにきたなく

なったのも、其の子どもたちのいたずらからでございませう。

二十六 母の心

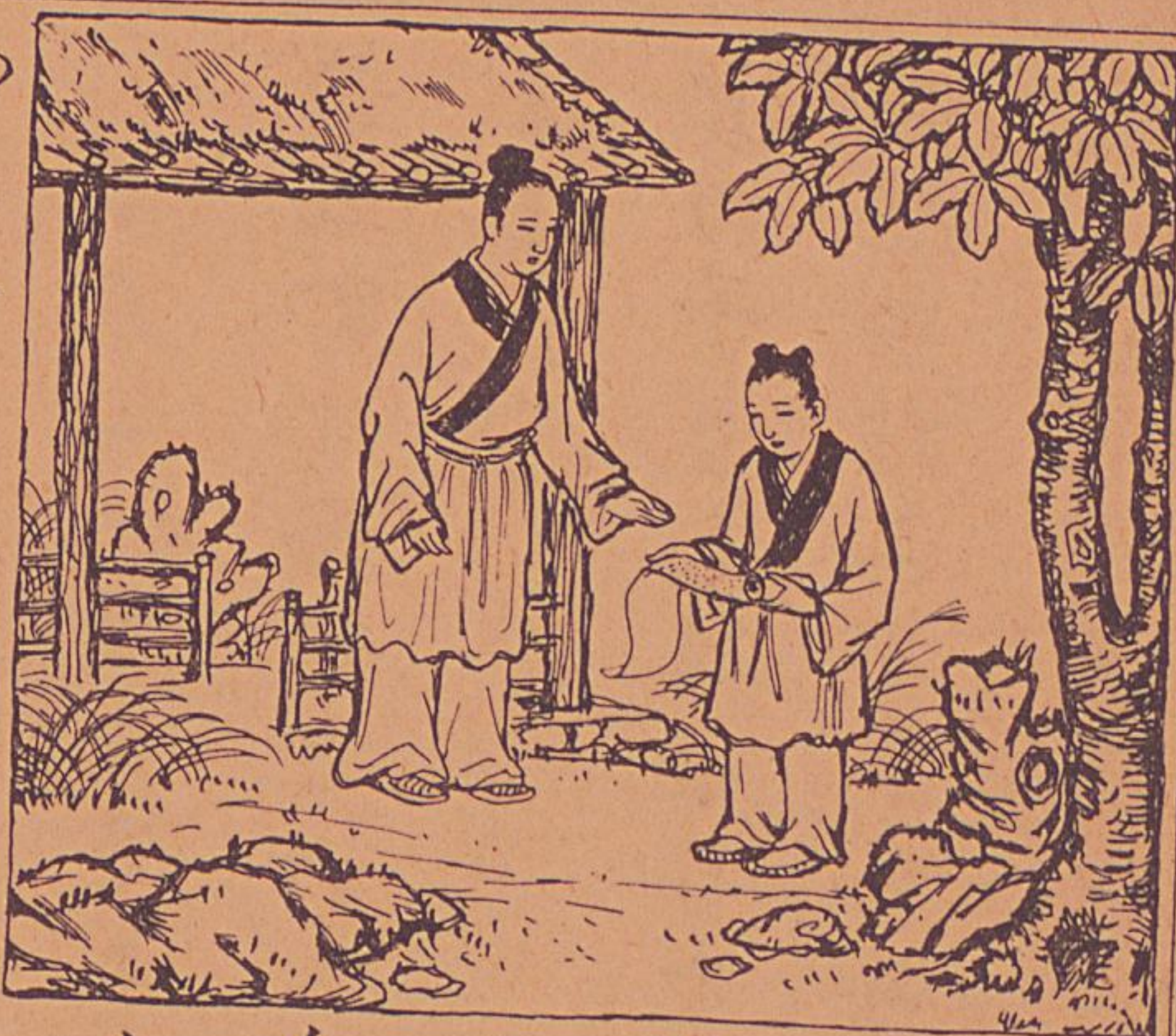
昔或町に、母親と一人の男の子がすんで居ました。

其の子どもは毎日々々、町を通る物賣りの呼聲や、おきやくを呼ぶ店員のまねばかりして居ました。

賣 聲 員

讀

此所



つこをしたりして遊ぶようになりまし  
 母親は此所もいけないと思つて、今度は學

母親は子どもの將來  
 のためによくないと  
 思つて、お寺の近所に  
 こしました。ところが  
 今度は、おきょうを讀  
 んだり、おとむらいご

安

者

校の近くへこしました。すると其の子ども  
 は本を讀んだり、字を書いたりするようにな  
 りました。そこで母親はやつと安心して、  
 いつまでもくそにすむことにしまし  
 た。

此の子どもは孟子もうしといつて、後にはりっぱ  
 な學者になりました。

二十七 熊のさゝやき

二人の者が山の中を通ると、熊くまが出て來ました。一人は早く見つけて、木の上へにげ上りました。一人はもうにげる間がないので、地にたおれて死んだふりをしていました。熊は死人には手を着けないと聞いていたからです。

熊が來て、からだ中かきまわしましたが、ほんとうの死人だと思つたのでしよう、其の

まゝ行つてしまいました。

此の時、木に上つていた者が下りて來て、

「どんなにこわかつたろう。」

僕は木の上から見てびくびくしていた。熊が君の耳

の所へ口を持

つて行つたよ

うだが、何か言



ったのか。

「うん。あぶない時に、友達をすて、にげる  
ような者には、これからつきあうな。」と言  
った。

二十八 天の川

世 織 姫

昔或る星の國に、一人の美しいお姫様があ  
りました。はたをお織りになることがお上  
手で、其のきぬは世にもめずらしいりっぱ

王

な物でした。

父の王様は、此のお姫様をことのほかごち  
ようあいになって、或る星の國から王子を  
むかえて、おむこ様になさいました。

お姫様は何事にもよく氣をつけて、王子に  
おつかえなさいますが、王子はとかくよく  
ないことばかりなさいました。夜おそくま  
で遊び歩いたり、朝おそくまでねていたり、

酒を飲んだり、かけごとをしたりして、御殿にいらっしやることはまれてございました。

腹 罪

之を、ごらんになった父の王様は、大そうお腹立ちになって、王子を天の川の北のきしから、六月かゝってやっ、と行き着くほどの遠い所へ、お流しになりました。お姫様には罪はありませんが、これも王子と同じく、天

の川の南のきしから、六月かゝって行き着くほどの遠い所へ、お流しになりました。

父の王様は、王子やお姫様がにくいので、こんなになさったのではありません。王子の心が一日も早くなおって、ふうふ仲よく暮すようにとのお心からでございました。それですから、七月七日の一日だけは、二人が天の川のほとりに歸って来て、あうことを

お許しになりま  
した。

王子とお姫様は、  
さみしいく旅  
をつづけて、六月  
かゝってやつと  
行着くと、すぐに  
又もと来た道を



旅



引きかえしてい  
らっしゃいまし  
た。そうして七月  
七日の朝には、天  
の川の南と北と  
にお着きになり  
ました。  
天の川はかゞや

岸

いて流れています。北の岸には王子、南の岸にはお姫様がいらっしやいますが、橋が無いのでおわたりになることが出来ません。お二人は思いあまってお泣きになりました。

折 下 落  
界

涙がはらくと落ちて、下界は大へんな大雨になりました。家は流れる、木は折れる。鳥もけものもじつとして居られません。そ

重

喜

こで元氣者のかさぎが天の様子を見に行くことになりました。

かさぎが天の川に来て、お二人の此のおなげきを見て、早速仲間を呼びよせました。そうして皆で頭をそろえ、羽を重ねて、美しい橋を天の川にかけました。之をごらんになった王子とお姫様のお喜はどんなであつたでしょう。此の時から天の川に橋をか



けるのは、かさぎの役目になつたと申し  
ます。

少 女

七月七日は七夕たなばたと言つて、日本では少年少  
女が星祭をいたします。

おわり

昭和七年三月二十日印刷  
昭和七年三月二十五日發行

(非賣品)

著作権所有

著作兼  
發行者

南 洋 廳

東京市本所區腕橋二丁目二十七番地

印刷者 井上源之丞

東京市本所區腕橋二丁目二十七番地

印刷所 凸版印刷株式會社本所分工場

